

当院の日当直帯における穿刺液検査の現状と運用改善に向けた検討報告

◎鈴木 航平¹⁾、村松 すみれ¹⁾、小川 和也¹⁾、石川 秀和¹⁾、高坂 仁美¹⁾、鈴木 直子¹⁾、武藤 淳¹⁾、石堂 統¹⁾
掛川市袋井市病院企業団 中東遠総合医療センター¹⁾

【はじめに】胸水、腹水などの穿刺液は、時間経過と共に細胞の変性・崩壊の進行が知られている。日当直帯における運用として、当院では日当直者によるシスメックス社製 XN-3000 の BF モード測定（以下機械測定）結果を参考値として報告後、一般検査担当者（以下担当者）による顕微鏡での細胞数及び細胞分画の目視による検査結果（以下鏡検値）を後日追記する形で再報告を行っている。この運用の問題点として、機械値と鏡検値に乖離が認められた場合、臨床側に結果の訂正の連絡が必要となる点が挙げられる。

【目的】日当直帯に提出された穿刺液の最適な保存条件を検討し、時間経過による影響を最小限にする。より真値に近い値を臨床側に報告するための新規日当直帯穿刺液検査運用を確立する。

【方法】検討検体：穿刺液（胸水、腹水）（n=20）
測定項目：目視による細胞数、細胞分画（白血球 5 分画、中皮細胞、形質細胞、異型細胞）
検討方法：①穿刺液攪拌後、BD バキュティナ採血管 EDTA2K10.8mg（以下 EDTA2K 採血管）に 2mL 分注し、

冷蔵保存する。②3 日以内に保存した穿刺液を鏡検する。
③当日と後日の鏡検値を比較し、細胞の数・割合を確認する。

【結果】細胞数（/μL）は当日から後日にかけて平均で 34/μL 減少（4%減少）であり、乖離は認められなかった。細胞分画は全検体において各項目で変動が 10%未満であり、分画の比率の逆転も認められなかった。

【考察】細胞数は、数・割合を評価し安定性が確認された。細胞分画は、割合としての変化が小さいことが確認された。今回の方法による検体保存において、鏡検値の経時的変化は少ないと考えられる。以上より、穿刺液を EDTA2K 採血管に 2mL 分注し冷蔵保存する運用は有効であることが推察される。

【結語】EDTA2K 採血管での鏡検値の安定性が確認された。日当直帯は日当直者が穿刺液を機械測定後、EDTA2K 採血管に分注し冷蔵保存する。担当者が機械値を参考に冷蔵保存された穿刺液の鏡検値測定後、鏡検値のみ結果報告する新運用を当院では検討中である。 連絡先:0537-21-5555